

歯とお口のマメ知識

親知らず

●親知らず

14歳頃～20歳過ぎに生えてくる
なぜ親知らずは正しく生えないの？

親知らずの生え方

●親知らずを放置しておく

●親知らずの治療法



アス横浜歯科クリニック

親知らず

歯は、あごの骨の中の歯胚とよばれる歯のもとからつくられます。乳歯の歯胚は妊娠7週目頃からできはじめ、永久歯の歯胚は出生する頃からできはじめます。

そして、乳歯は生後6ヶ月頃から生えはじめ、3歳頃までに上下各10本ずつの20本が生えそろういます。

永久歯は第1大臼歯と前歯が6歳頃から生えはじめ、12歳頃までに永久歯上下28本が生えそろういます。そのあと早い人で14歳頃から、遅い人は20歳を過ぎてから「親知らず」は生えてきます。



14歳頃～20歳過ぎに生えてくる

他の永久歯と比べ、生えてくるのがとても遅く、多くの場合は親元を離れてから生え始め、親の知らないうちに生えるというので「親知らず」と呼ばれています。「親知らず」とは、歯列の一番奥の第3大臼歯のことを言います。

知恵がついてから生えるというので「知恵歯（ちえば）」・「智歯（ちし）」とも呼ばれています。

なぜ親知らずは正しく生えないの？

親知らずは、傾いて生えたり、横向きに生えたり、歯の一部だけしか出てこないなど正常に生えてこなかったり、歯はあってもアゴの骨の中に埋まったままで、歯が生えてこなかったりします。

その原因はいくつかあると言われていますが、一番の原因は、現代人の食生活にあると考えられます。昔の人の食生活は硬いものが中心でアゴの骨が発達し、親知らずが生えるスペースが十分にありました。



ところが、現代人の食事は柔らかい食品が多く、結果としてアゴの骨が十分に発達せず、顎が小さくなってきています。そのため、永久歯がすべて生え揃うだけのスペースがなく、親知らずは正しい位置にきちんと生えないことが多いのです。

親知らずの生え方

親知らずには、さまざまな生え方があります。



①上下がきちんと咬み合い正常に生えている状態



②親知らずが途中まで生え、前の歯に当たり、完全に生えることがない状態

このような状態はアゴの関節に負担がかかり、頬や歯茎を傷つけるようになります



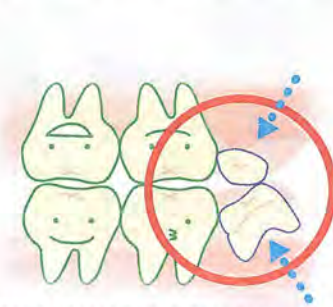
③上の歯は正常に生えているが、下の歯が正常に生えてこなかったり、欠損して歯がなかったりすることにより親知らずが他の歯より出すぎてしまう状態

食べかすがたまりやすく、歯茎が腫れたり、虫歯になりやすくなります

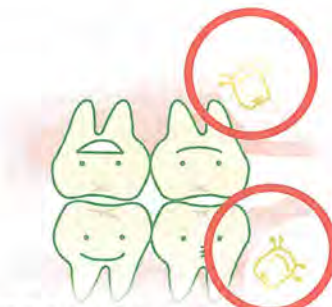


④水平に顎骨中に埋まった状態（水平埋伏歯）

歯ならびを悪くしたり、第2大臼歯の歯根が吸収されたりします



⑤親知らずが外側や内側に向かって生えている状態



⑥顎骨の中に埋まったままの状態

親知らずを放置しておく

正常に生えていない親知らずを放置しておく、さまざまな歯のトラブルを引き起こします。ここでは代表的なものを見てみましょう。



親知らずの痛みや腫れ（下顎智歯周囲炎など）

親知らずを放っておくと、「下顎智歯周囲炎」という病気になりやすくなります。親知らずが半分だけ頭を出した状態では、親知らずとその前方にある歯との間に食べカスなどがたまりやすく、食べたものを押し込み、歯を磨いただけではなかなか取れません。こういう状態では、食べカスが口中の細菌によって腐敗し、周囲の組織に炎症をおこします。歯肉が親知らずにかぶさるようになっている場合も、親知らずと歯ぐきの上に食べカスがたまり、炎症がおきやすくなります。

下顎の親知らずの周りの組織は炎症が広がりやすく、感染を放置しておく周囲に広がっていきます。頬が腫れたり、顔全体が腫れ上がるなどの症状や痛みがおき、ひどくなると、のどにまで炎症が広がり、食べ物が飲みこみにくくなります。炎症が広がると、口が開かなくなったり、さらに炎症が進むと、発熱や悪寒などの症状があらわれます。

症状等によっては入院が必要になることもありますので、親知らずの炎症と簡単に考えずに、腫れるようなことがあったら、すぐに歯科医院等で診察を受けてください。



歯ならびを不揃いにする

一般的にすべての歯は支えがなければ口の先端方向に傾いたり、移動しようとして（「ゴードンの法則」）。歯列の最後に位置する親知らずに対し、正常に生えるスペースがない場合、常にすぐ前の第2大臼歯を圧迫しつづけることとなります。そうすると歯列全体が押されるため、歯ならびを悪くする原因となります。矯正治療をする場合、歯科医が歯ならびをきれいに保つため、正常に生えてこない親知らずの抜歯を勧めるのはこのためです。

歯根の吸収

第2大臼歯の親知らず側の歯根は、埋もれた親知らずによって絶えず圧迫され、溶けて親知らずに吸収されることがありますので、その時は第2大臼歯も抜歯しなければならなくなることもあります。

口臭・むし歯・周囲炎の原因

口の中が不衛生になるため、ばい菌の温床となり、口臭の原因になります。また、正しいブラッシングができないため、むし歯や周囲炎をおこしやすくなったりします。

顎関節症を招く

親知らずの異常な生え方により、歯ならびがおかしくなり、そのために正しくない噛み合わせが習慣的となり、顎の関節に負担をかけてしまい顎関節症を招いてしまうことがあります。



親知らずの治療法

「できるだけ歯を抜かない」という最近の歯科医療の傾向は、親知らずについても例外ではありませんが、他の歯よりもさまざまな理由で抜歯せざるを得ないケースも多いのが現状です。

抜歯する場合

①親知らずが正常に生えていないとき（傾いたりしている時）

②ひどいむし歯になっているとき

神経（歯髄）も死んでいる可能性が高く、放置すれば歯の根の先に細菌が巣を作り、全身に感染がひろがることもあるため。

③歯周病になっているとき

■歯がグラグラ動く

■歯石

■歯ぐきが腫れている

*放っておくと健康な歯まで悪化してしまうのを防ぐために抜歯します。

④むし歯や歯周病はさほどでもないが、あまりにも口の奥の方に親知らずが生えていて、歯みがきができないとき

⑤しっかりと生えきらずに、半分歯ぐきの中に埋まっていて、しばしばその周囲に痛みがでるようなとき（急に痛んだり、腫れたりする）

役に立つ親知らず

ブラッシングによって清潔さを保てる時、歯は生えきっていないが、今まで一度も痛くなったことがないなど、よい状態で保った親知らずは、大切に保管することにより、将来、ブリッジや義歯の支え、その他奥歯を失った時に使ったりできます。